指導と評価の一体化で必要なこと（３）

１　評価に応じた支援

評価規準に達していない子供たちに対して、適切な支援をする必要があります。

指導→評価→指導（評価に応じた指導）のサイクルが順調に回っていくことが「指導と評価の一体化」です。

「評価に応じた指導」は、教科や目標、活動の実際に応じて様々な方法が考えられます。なかなか一般論などは考えにくいところです。

しかし、研究において大切なのは、指導の原則や条件を明確にすることです。それが子供たちの指導に生きるようにするのです。

そこで、以下では、各観点に沿った指導の原則を考えてみることにしましょう。

２　「関心・意欲・態度」を育む指導の原則

大きくは次の３つがあると考えます。

（１）欲求充足を促す

①魅力的な活動を工夫する。

例えば、教室の外での活動を実施するとか、ゲーム性を持たせる等です。

②知的好奇心を刺激する。

認知的な不協和を感じさせることや、活動の前に「予想の場面」を設けること、選択の場を設定するなどは、知的好奇心を得させ、それによって、活動や認識に対する関心・意欲・態度を高めることができます。

（２）見通しを得させる

①問題解決の方略の得させ方を工夫する。

課題を明確にすることや、解決の内容と方法を明確にすること、課題解決の状態（ゴール）までの距離を自覚させることなどもこれに含まれます。

②課題解決のよさを感じ取らせる。

今までに、「課題解決して満足した経験」や「課題解決したことのよさ」などを想起させることは有効です。同時に、今取り組んでいる課題が解決したときのことをイメージさせることもよい方法でしょう。

（３）友達とのかかわりのよさを感じ取らせる。

①友達の考えとの違いを明確にする。

友達の考えを知らせ、それとの違いを明確にすることによって、関心意欲が高まります。

②友達との協働のよさを感じ取らせる。

友達と一緒に問題解決していることや、問題解決することのよさを感じ取らせたりすることは有効です。

３　「見方・考え方、思考・判断」を育む指導の原則

（１）活動へ取り組む視点を与える。

①十分な活動の時間と場の保障をする。

活動へ取り組む際に必要な視点の基盤として、十分な時間と場の保障は大切です。試行錯誤や失敗から学ぶことなども大切でしょう。

②活動へ取り組む視点や、めあてを再度自覚させる。

事前に得させると共に、活動中にも必要に応じて、自覚させることはよく行う指導の原則です。

（３）話し合い活動の工夫をする。

①共通の意識の保障をする。

話し合いの目的、話し合いの内容、話し合いの方法の共有が図られていないから、十分な見方・考え方などが育まれていないことは良くあることです。

②一人一人の意見の違いを明確にする。

出てきた意見を、ある観点から類別すること、そして、比較検討するための視点の設定と時間・場の保障を行います。

４　「表現・処理、技能」を育む指導の原則

（１）楽しさを感じ取らせる。

計算練習や漢字練習など、繰り返し取り組むドリル学習において、めあてを自覚させたり、ゲーム性を持たせたりすることは楽しさを高めることができます。

（２）納得を得させる。

繰り返すことのよさを自覚させることや「できるようになったこと」によって「よかったこと」を改めて感じ取らせることを通して、繰り返しのドリル学習の納得を持たせます。

（３）高まりを自覚させる。

繰り返し学習の場合でも、相手に対する表現においても、自分の技能や表現がどれだけ高まったのか分かるようにするのは、大切です。

（４）相手意識を持たせる。

表現の技能は、「どのように伝えるのか」にかかわるのですが、それは、「相手意識」に左右されます。「誰に対して何を」を明確にすることで、「表現・技能」は高まります。

（５）コツ

これらの４つのことをふまえた上で、片々の技術やコツが習得されたり、そのよさが分かったりすると考えられます。

５　「知識・理解」を育む指導の原則

（１）教えることを精選し、明確に伝える、教える。

必要なことは、明確に伝え、教えることは大切です。

（２）体験や活動を通して、結果として「分かる」。

はじめから、教え込もうとしても難しいことは多いです。楽しく生き生きと学ぶ体験や活動を通して、分かっていくことは少なくありません。「急がば回れ」です。

（３）生活に生かすことで「納得」を得させる。

知識・理解は、結局、道具にしか過ぎないので、何かを達成するために使われてこそ意味あるわけです。したがって、（２）と同じことではあるのですが、必要な「知識・理解」を道具的に扱うことができるような学びの文脈をつくるのも、知識理解を得させる指導のポイントですね。

以上、「指導と評価の一体化」に必要なこととして、３つに分けて考えてきました。もう一度まとめてみましょう。

（１）評価規準を学習活動や学習内容に具体化する。それは、子供の具体的なイメージを明確にすることである。
（２）実際の子供を観察して、それが、評価規準を達成している姿かどうかを教職員で話し合う研修の機会を充実する。それは、（１）を教師の共通理解とすることである。
（３）評価の観点ごとに、それを高める指導の原則を明確にする。それを、一人一人の子供を見取り支援することに活用することが大切である。。

（１）と（２）に自覚的になることは、教師の日頃の負担を少なくすることです。そして、（３）を日頃から意識して指導にあたることで、単元やその時間の目標を達成することができるように配慮することが重要だと考えています。

目標を評価の観点ごとに分析的に捉えることができるようになり、それが体験的に自然な形で教師に身に付き、子供が伸びることが、「指導と評価の一体化」の終着点だと考えています。